

ほとけの混和会だより

平成二十六年十月
東光院
仏の混和会
第107号



比叡山根本中堂の内陣
ここは、修行の谷だった。

九月二十日から、わずか三日間ですが、比叡山の根本中堂で、お勤めして参りました。

この根本中堂は、およそ千二百年ほど前に伝教大師最澄様が建てられた一乗止観院が元と成るお堂で、何度か焼失し、その度に再建されて、現在の建物は寛永十九年徳川家光の命によって再建されたものです。その時名前を、仏陀の教えの根本を修得する道場として、根本中堂と改められました。最澄様は、延暦四年四月、奈良の東大寺で具足戒を受けます。

私達は、何の為に生きているのだろうか

No. 2

僕は交通事故で亡くなってしまい、今極楽浄土に居ます。前号参照



ねーねー お坊さん、あみだ僕の師匠、阿弥陀さんね、お勤め苦勞様でした。しばらくこのお浄土でゆっくり休んで下さい。と言うのですよ、僕小学一年生だったのだけど、なにか尊い仕事をしたのかな？、僕は何の為に生まれて来たのかな？、お師匠さんの気持ちが良く解らないのです。



そうだね、君に阿弥陀さんの御心を理解するのはちょっと難しいね、君のおられる極楽浄土の阿弥陀佛はね、死後の世界の人々だけを幸せにしようと考えているわけではなく、君が元気な頃の君のお友達やお父さんのおられる世界の人々もみんな幸せに成ってもらおうと考えておられるのじゃよ。

安心に満たされる幸せな社会を極楽浄土と言って、この現実社会に於いても極楽浄土にしなければならぬのじゃよ。その極楽浄土を作るには、人々は、みんな仏様の心を持っていないと極楽浄土にはならないのじゃよ。仏様の心とわね、人の痛みの解る慈愛心なんじゃよ。

この具足戒を受けると、国家公認の僧侶として認められて、地位と衣食住が保証されるのです。今の言葉で言えば高級官僚のようなものだったのです。

当時の僧侶は奈良の都の恵まれた環境の中で、より良い地位を得る事のみに専念し、己の悟り、言い換えれば、己の幸だけを求めていたのです。

政権を司る皇族達も、政権争いに明け暮れて、公然と殺略が行われておりました。

しかし民衆の人々は、奈良の大仏建立や度重なる遷都、その度に労働を虚げられ、貧困と飢餓、更に疫病など、地獄さながらの生活をしていたのです。

最澄様は、飢えに苦しむ人々をまのあたりにして、「互いに己の幸だけを求めていたのでは、争いは絶えず、真の幸は得られない。己の幸より、他の人々の幸を求めよう」と確信して、わづか三ヶ月後の延暦四年の七月あつさりとの崇誉を捨ててしまい、比叡山の山奥に草庵を造り、勉学と修行に専念されたのです。

その後延暦七年最澄様の志に賛同された桓武天皇は根本中堂の前身と成る一乗止観院を建立し、共に他の幸を願う、仏心育成の道場とされました。

私達の生きる、この社会には様々な苦しみがあるよ。

たとえば、生きる事、老いる事、病、そして死、みんな苦しみじやろ、その苦しみをみて学び、身近な人の死と言う悲しみに触れて、号泣する、このような様々な経験によって、人の痛みの解る慈愛心が生まれるのじゃよ。

ほんの数十年前は、生老病死、この避けがたい現実の姿を地域の中で見て学び経験する事が出来たのじゃが、今では全て施設の中に隠されてしまい、子供さん達は、仏様の導きを見て学ぶ事ができなくなりましたのじゃよ。

だから死というものが、漠然としていて何なのか解らない状態でリセットすれば生き返れると思う青年まで現れてしまい、ゲーム感覚で殺人行為を引き起こす時代に成ってしまったのじゃよ。

ある人がこのようにいつたよ、「苦しみがなくなると救われるのでは無い、苦しみのお陰で救われるのです」と、その苦しみの経験によって大きな仏心に目覚めるのじゃよ。

さて君の行った尊い仕事とはね、死とは辛い悲しいものなんじゃよ、命とは尊いものなんじゃよと、君はたつた一つしか無い己の命を持って、お友達や様々な人々に知らしめてくれたことなんじゃよ。後に生きる人々は、君の尊い命が無にならないように、どの様に受け止めたら良いのか、自問自答して行く事と思うよ。



ねーねーお坊さん、ところで、比叡山のお勤めは、どうだったの？



おーおー、そうじゃや肝心なお話を忘れていたよ。

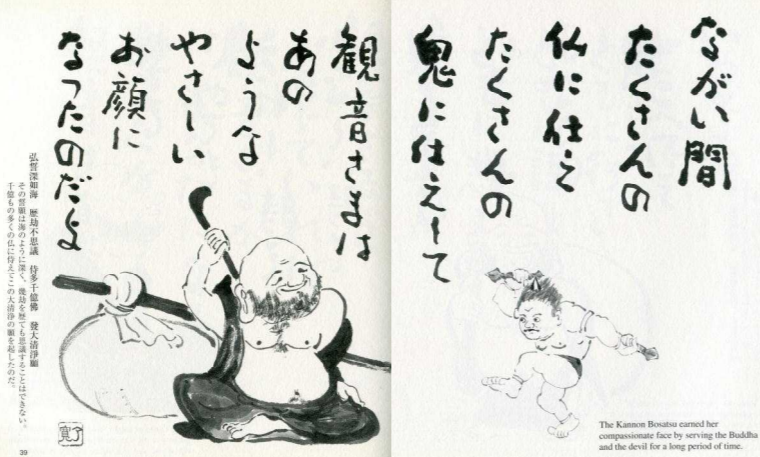
この度のお勤めは、「根本中堂に参拝された人々に最澄様の御心をお話し下さい」と依頼されて出かけていったのじゃが、何を話したら良いのだろうか、私に出来るのだろうかとか色々心配だったのじゃよ。

そこで前日の十九日に比叡山に行き、前の人々が何を話しているか聞いてみる事にしたのじゃ。すると経験豊かな布教師さんが感動的なお話しを淡々と語っているのじゃよ。私は益々焦心してしまつたのじゃ。

しかし、にげていては辛くなるばかりだから、己を偽らず、飾らず、他と比べない、ありのままの姿で、取り組んで行こうと、己に言い聞かせ宿に着いたのじゃ。

その宿は、総持坊という宿舎で、参拝者の皆さんが宿泊される延暦寺会館とは事なり、昔ながらの建物で、廊下はギシギシとさしきみ、お風呂も狭く寒そうなところだったのじゃよ。

部屋は十二畳の部屋が二部屋と十畳の部屋と仏間、その広い部屋に私一人なんじゃ。なんか心細くなって、夜、懐中電灯を持って延暦寺会館のお風



これは天台宗ハワイ別院の住職、荒良寛様の書です。

仏様は、時には、優しく、時には、厳しく、時には、悲しみも、苦しきも授けて下さいませ。しかし、それらは、すべて導きなんです。何事も否定して受け止めず、導きと受け止める事で、その経験が無にならずに生かされるのです。心して参りたいと存じます。

おそばの収穫を致します。

11月16日(日曜)
午前9時～
12時頃まで



お陰様で台風の被害も無く、無事に収穫の時期を迎える事が出来ました。本年度も、皆様の御協力を仰ぎながら共に生きる環境を築いて参りたいと存じます。ご奉仕宜しくお願致します。